

東京都立国分寺高等学校への平成 28 年度備品助成結果報告

長尾嘉崇

高校で学ぶ生物学では生物多様性について取り上げられている。多様性の舞台となる生態について生徒が自ら学び、自ら考えるには、直接自然に触れさせるフィールドワークが欠かせないものと考えられる。

国分寺高校生物部は、茨城県の霞ヶ浦にて水生生物を中心に生態調査を 4 年間継続して行ってきた団体である。たも網や定置網、セロ瓶などを用いることによって水生生物を採取し、場所（霞ヶ浦、霞ヶ浦周辺の農業用水路および霞ヶ浦に流れ込む河川、北浦など）、季節（春夏秋冬）を変えることによってその種類数や個体数の変化を調査している。

これまでの結果として、湖と用水路や河川では生息する魚の種類が異なることや、同じ種類の個体でも季節による個体数の変化が認められたことがあげられる。前者は魚によって生活環が異なることが原因であると考えられ、後者は文献等と比較することで繁殖行動との繋がりが大きいものと考えている。

また、新しい活動として、外来種であるチャネルキャットフィッシュが霞ヶ浦の生態に与える影響も調査している。当該魚は季節に関係なく毎回の調査で捕獲できており、その生物量もきわめて多い。生態系の保全を生徒に学ばせる新しい教材・題材としても適切である。

今回、公益財団法人藤原ナチュラルヒストリー振興財団に助成いただき、春季における霞ヶ浦生態調査を 17 名で行うことができた。

たも網やセロ瓶などを用いることによって、テナガエビ、ドジョウ、ギンブナ、ヌマチチブ、ツチフキ、ウキゴリ、ブルーギル、タイリクバラタナゴ、オオタナゴ、タモロコ、スゴモロコなどが観察された。しかし、魚類の全引数は毎回の 300 匹程度と比較して 50 匹程度と少なかった。特にタイリクバラタナゴは 2 匹、オオタナゴは 1 匹のみの捕獲であった。

そこで、地元の漁師さんや釣り人への聞き取りを行った結果、冬に農業用水路の水抜きがあったことがわかった。そのため、ドブガイに卵を産み付けるタナゴ類の個体数は特に減少したものと考えられる。また、チャネルキャットフィッシュに関しては、捕獲もできなかつたため、今回の調査では実体を調査することはできなかった。

今回の霞ヶ浦調査は、高校 1 年生にとっては初めての調査であった。胴長（腰まである長靴）の着方や網の持ち方、注意すべき危険な生物など、先輩生徒から後輩生徒への引き継ぎが行われていた。また、フィールドワークに参加した生徒からは、「私はやっぱり生き物が好きだ。採るのが楽しい。」「将来は生態に関わる職業に就きたい。」という話題が、会話の中からも出てきていた。助成いただいた藤原ナチュラルヒストリー振興財団に心からお礼申し上げたい。

